

2008

日カン体育科教育指導会 in チェイ小学校

指導者・感想文集



目次

ページ	所属・執筆者名
3	岡山理科大学特任教授・太田正和
4	吉備国際大学教授・小原信幸
11	岡山市立御津中学校教諭・森祐子
14	朝日リハビリテーション専門学校講師・勝部園
15	岡山大学大学院・光永知己
16	川崎医療福祉大学・泉昌孝
17	ノートルダム清心女子大学・佐伯聖子
18	川崎医療福祉大学・大作有紀
19	川崎医療福祉大学・土井宏美
20	ノートルダム清心女子大学・新家祐子

祝 体育・スポーツ教育の夜明け



岡山県大学スポーツ国際交流推進機構理事長
岡山理科大学 特任教授 太田正和

ハート・オブ・ゴールドの事業の一つであるアンコールワット国際ハーフマラソン 2008 とカンボジア王国小学校体育指導書作製内容を基にした実践指導会へ私は岡山県大学スポーツ国際交流推進機構（以下・推進機構）理事長の立場で（今回連続六回目の訪カン）大会へ協力参加しました。12

月 6 日はウォーキングで現地の少年たちと楽しい交流を持ち、翌 7 日は慣例となっている世界遺産ランク上位のアンコールワットを背に第 13 回国際ハーフマラソンが行われました。世界 42 カ国から約 2600 人（うち HG のツアーで 84 人）の参加で、昨年を上回る大会史上最多だったと聞きます。本当に盛況で有意義な大会でした。

今回特筆したいのは冒頭に上げたカンボジア王国小学校体育科指導書内容を基にした実践指導会です。それは、シェムリアップ州のチェイ小学校に、ハート・オブ・ゴールドより贈呈、整備された運動場で、陸上、バレーボール、バスケットボール、サッカー等の技術指導を行う、というものです。初日、日本側の指導者 33 名とカンボジア側の指導者 31 名が種目ごとに分かれて、カンボジアの先生方に対して、教室内で理論面の学習と実践面の指導打ち合わせを行い、二日目の実践指導に備えました。実践指導には、カンボジアの生徒、4 年生、5 年生、6 年生各 40 名ずつの 120 名が参加し、昨日指導を受けたカンボジアの先生方が作成した指導案にのっとり真剣な指導振りでの授業が初めて行われました。日本の先生方（日本の大学生諸君も含む）は事前のグランドチェック・手直しから始まり、いよいよ本番。（前日カンボジアの先生方へ指導したその効果を確認めながら）共に全日程にかけて大活躍です。カンボジア国内には体育科について国が定めた指針が無かっただけに、体育教育の先駆けとなる記念すべき日になることを願わずにはられません。

私たちの推進機構は、県内の大学を中心に、教職員、学生らで 2002 年に結成、その活動の一環として、私は本会（HOG）の目的に沿うべく、カンボジア自立支援活動訪カンを毎年継続しており、共に参加した学生たちは一様に人生観を変えて帰ってきます。日本の学生は恵まれすぎた中で先が見えにくい状況にあります。こちらは好奇心旺盛で夢も希望も持っています。そんな姿に接することが出来、大変な刺激を受けています。まさに、実践教育の場です。

今回の全てのスケジュールを終え帰国した翌朝、まだ眠気は残るものの、興奮冷めやらぬ私の頭には、カンボジアの少年少女たちの飛び跳ねる姿が浮かんできます。目の輝き、身のこなし、抜群の反射神経等、彼らはまさに自然児でした。この体験で得たことから、私は次のことを感じました。

「現代科学だけに流されないよう自然との共生を重視し、軟弱にならないよう人間本来の持ち味を出したい。」

最後に、推進機構を 6 年前に共に立ち上げたチャーターメンバーの吉備国際大学教授小原信幸先生（大会監督+指導者）と川崎医療福祉大学教授柚木脩先生（大会医療担当）のお二人と今回一緒に訪カンできたこと大変心強い限りでした。そして、事前準備から奔走した各氏学生諸君も含めて、心より敬意とお礼を申し上げる次第です。今回のイベントの舞台となったチェイ小学校サルーン校長先生と、同校内にあるスバラシイ成果を上げている日本語教室の桧尾先生の息もぴたりで頼もしい限りです。この機会を与えていただいた HOG の有森裕子代表、田代邦子事務局長、山口拓大会統括、深山計 MC を始め、サポート関係皆様に感謝と今後のますますのご活躍、そしてカンボジア王国の一日も早い自立復興を祈念いたします。



第二回 日カン交流・研修ツアー（2008・12・5～10）

アンコールワット国際ハーフマラソンに参加して

吉備国際大学社会学部スポーツ社会学科 小原信幸

申請書の提出

平成 20 年 5 月頃であったと思いますが、HG 事務局の田代さんから、私に「岡山県に今年も申請をするのであれば時期が来ていますが、如何しましょう」と言う相談の電話が入りました。昨年申請をして頂いましたね。出来れば今年も、と言ってご無理なお願いをしました。そして、9 月東京に行っている時だったと思いますが、田代さんから「県から連絡があり、昨年は半額だったが、今年は全額頂けるとのことで、スポーツ施設設置と派遣費用とすることで如何でしょうか」と言う電話が入りました。ありがとうございます。良かったと内心思ったのですが、その後昨年の第 1 回日カン交流・研修会に行けなかっただけに今年はどうしてもカンボジアに行きボランティア活動をしようと決心をした。それ以来ソフトテニス関係者には、今年は役職最後の年だけれど後半の理事会・評議員会は欠席すると言いつけて、後を継いで下さる方に審判関係について引継ぎを兼ねてお願いをして来ました。

10 月に入り岡山県は財政構造改革プランに伴い「財政危機宣言」をし、ほとんどの補助金等をカットするとのことで、「岡山発国際貢献活動推進事業<豊かな心と健やかな体のための教育支援>」補助事業が来年から打ち切られるため最後の年となりました。しかし、この事業は補助がなくても続けて行かねばならない使命を感じています。

スタッフの準備

事前にハート・オブ・ゴールドと岡山県大学スポーツ国際交流推進機構との打ち合わせを 3 回にわたって岡山大学三浦研究室をお借りして行って来ました。参加協力スタッフについて推進機構では理科大学太田教授、川崎医療福祉大学柚木教授、岡大 OG の勝部さん、HG 田代邦子(HG 事務局長)さんと私(小原)、そして学生(岡大・川崎医療福祉大・清心大)等と取り組みについて話し合い、3 回目にはカンボジアから山口拓(HG アジア地域事務所所長)さんが帰国され、カンボジアの子供達のスポーツ・体育に関する現状について話をし下され、この度完成した小学校体育学習指導要領に基づいた指導について話が弾む。続いて指導案については「日本の指導書と同じように、目次・年間計画・単元・単元計画・挿絵等を入れて指導案を書いて、それを実施する」と淡々と説明された。次に皆さんは「4 年生・5 年生・6 年生の 3 学年を 1 日目にカンボジアの「指導者に」指導され、2 日目は指導を受けたカンボジアの指導者がカンボジアの子供達に指導しますので、皆さんはカンボジアの指導者が指導案を書いてそれに基づいた指導をする実践の場を見て、講評をして頂けると良い」と説明され、あと「指導案はメールでやり取りしましょう。指導案は 11 月 20 日(木)頃を期限に山口拓までメールで送ってくれとよい」と言われ説明会に参加したスタッフは納得されていたみたいでした。担当割り振りは、サッカーは大作、バスケットボールは泉・勝部、陸上運動は光永・土井、バレーボールは担当学生がいないので小原に割り振られた。最後に参加が決まった清心大の新家・佐伯はバレーボールの補助者と決まった。

ところが、それからが大変でした。私は、全国大会や国際大会で走り回り学校に出ると 4 年生の卒論との戦いで時間に制約された。その上、何十年も遠ざかっていた



バレーボールの指導案を試行錯誤して作成し山口さん宛てにやっとメールで送ったところ、貴方の作ったものは感心しないので、「参考例」を送りますので作り直してくださいとのメールが返ってきました。と同時に、「他の方からの指導案はすでに届いております。との文字が目に入る」それからがさらに大変でした！ 我が家のパソコンは壊れるし、FAX では送れないし、挿絵はスキャナで取り入れないといけないうし、初めてする作業でてんやわんやでした。ところが、山口さんも色々手伝ってくださりこちらの気持ちを理解してくださっている様子が手に取るように分かるだけに心が痛みました。12月2日(火)に最後のメールを送るが時間切れになったと心配していました。ところが、現地で手にした指導書は想像を超える素晴らしい指導書の冊子となっていました。後で、川崎医療福祉大の学生さんも卒業論文と戦いながらの指導案作りで大変だったと聞く。

日カン交流・研修ツアーの始まり

第1日目(5日一金)、午前8時岡山空港に集合。次々とメンバーが集まった時、参加者メンバーと今後のスケジュールに併せて新装された運動施設図を渡されました。それまでのイメージとしては、ちょっとした広場で指導すると思っていたところ、我々のために施設を作り間に合わせたと聞き、プレッシャーがかかったと同時に意気込みを感じました。9時50分(KE748)発でソウルを経由してシムリアップ21時40分着、それから入国手続きを済ませて外に出た。6年前に訪れた当時の面影はなく、空港は新しい建物で我々を迎えてくれた。バスでシティアンコールホテルへ直行。シャワーを浴びて11時30分就寝。(時差は2時間で遅い)



ウォーキング大会・植林活動及びチャイルドケアセンター訪問&前夜祭



第2日目(6日一土)、4時30分起床。5時45分バスでホテル出発。会場に着くと、7時から始まるウォーキング大会に参加する方々が、バスや車で集まってくる。開会式が始まり、HG有森代表の挨拶に続き、チェイ小学校の生徒代表からハート・ペアレント事業で学芸館高校へのお礼の言葉等があった。チェイ小学校の代表の素晴らしい日本語に感激し涙がこぼれる。その後、ウォーキング参加者を対象に学生のリードによる準備運動。後は参加したカンボジアの子供たちと手をつないで会話しながら5kmウォーキング大会が始まった。有森代表も一生懸命子供たちと話をしながら歩いていた。時には車椅子に乗ってみて、感想を述べられていた。私はチェイ小学校4年生のセイラー君と一緒に歩きました。15歳で体つきも大きい方で、将来は医者になりたいとのことでした。特にバレーボールはよくしているとの事でチェイ小学校のバレーボールの授業で再会を誓った。広場へゴールして5km完歩証をもらいました。引き続き、レクレーションタイムとなり子供たちと縄跳びやゲームをして楽しく遊び、多くの方と触れ合うと言うことで、着ているTシャツに名前を書き合う競争をしました。お別れの前に、参加した子供たちに県下の小学校等から頂いて来たお土産をプレゼントし来年の再会を誓った。

その後、オイスカ植林活動に参加し子供達と協力して植林を



しました。いたるところに穴が掘ってあり、そこへ苗木を植えるのですが、手や移植鋤では土が動かないのでスコップを借りて、少し頑張りました。レストランで昼食。その後、チャイルドケアセンター訪問。子供たちの踊り(伝統舞踊)を見て感激し、住んでいる男子寮と言われる建物の二階に上がって中を見学。参加者からのボランティア精神に感動・感激し、ナッツ/ヤシ化粧箱入りを1ケース6ドルで6個買って胸の詰まる思いがしました。ところで、明日の予定計画に、アンコールワット遺跡を見学する時間の配分がないことが気になり、田代さんに山口さんと話をして時間を取って頂く様にお願いをしました。学生さんがアンコールワット遺跡も観ずに帰ると、後で悔いが残ると思ったからです。夕方はアンコールワット国際ハーフマラソン前夜祭に参加し、有森代表と記念の写真を写す。次々と各代表の挨拶。有森代表から長い挨拶だから、そろそろ食事を始めてくださいと連絡に来てくださったので、早速バイキングの食事をしながら、伝統舞踊(1 ロイヤルダンス、2 ココナッツ・シェルダンス、3 シーター姫の救出等)を観賞する。柚木先生は明日アンコールワットハーフマラソン5km 走に出場する土井にコブラの肉だと言って食べさせ、明日は元気が出るぞ！と励ます。土井は美味しかった！頑張りますと言って答えていた(笑)。

アンコールワット国際ハーフマラソン並びにアンコールワット遺跡見学 & チェイ小学校訪問事前準備



3日目(7日一日)、4時30分起床。5時45分ホテル出発。いよいよアンコールワット国際ハーフマラソンがカウントダウンされています。5kmに出場する土井・泉・大作はウォーミングアップ、残るスタッフは本部係りに太田・勝部・森、会場係り光永、写真係りに新家・佐伯、医務係りに柚木・小原。会場も騒がしくなり開会式が何時始まるかと思っていたら、すでに次々とスタートしています。柚木先生は土井が20分以内に入れば入賞するだろうと言っておられ、スタート前に“激”を入れようと言って、「スタートが

肝心だ！最初だぞ！」、走るためにやってきたという土井さんに、前夜祭の時“コブラ”だと言って食べさせた肉(実は鳥肉？)、睡眠は採らない方がいいと言っていたが如何したろうか。とか食事の取り方等についても大丈夫と言っておられた。最後にキャラメル1個ホイ！と渡され糖分補給させた。3人の荷物は医務のテントの中に預かった。準備運動も出来万全の体制でスタートに向かう。柚木先生に見守られてスタートした。やがて周辺にざわめく声がすると、18分53秒で土井さんがゴールした。見事ブッチギリの優勝である。おめでとう！医務班も、調整不十分でコールドしてぶっ倒れるランナー等の治療の対応におうあわわ。その時、西洋医学と東洋医学の違いを垣間見る事ができました(救護班の特権であった)。最後のランナーが入った頃、表彰式が種目ごとに始まり5kmで優勝した土井さんのプレゼンターは有森裕子代表で直接メダルと副賞を受け取り感激したようです。

午後からは、当初のタイムスケジュールを大幅に変更、14時からのチェイ小学校視察・授業準備をわがまま言って16時にして頂き感謝しています。ホテルで昼食を済ませアンコールワットの世界遺産見学へ足を運ぶ事が可能となり、13時から15時30分までアンコールワット見学。その上経費についてもご配慮してくださり感謝しています。案内は地元のガイドでチャイさん、「チャイ」とは頭にわくしらみを意味しているとか説明をされ笑わせた。とても親切に見所のポイント毎に説明をして案内くださいました。記念の写真も写すことが出来胸をなでおろしました。16時チェイ小学校に着くなり、先生や子供達が最後の整備をしていたので、我々も明日に控え、会場レイア





ウトを基にスコップを持って土起こしをし、その上コート均しもしました。土運びは一輪車等なく、布袋の中の両側に棒を通し、2人で協力して土を運ぶ昔ながらの作業を経験した。また、メジャーを持ち出しグラウンドにトラックを描き石灰でライン引きもしました。バレーコートのネットの高さを子供用に低くし明日に備えました。夕食後、指導者は事前の打ち合わせや、ボールの空気入れなどの準備を済ませ各グループ毎に指導内容等最後のチェックをしました。夜は宿舎で渡された指導書の冊子

に目を通しておく為に遅くまで電気をつけて同室の柚木先生に迷惑をかけました。ごめんなさい。

指導伝達・友好親善食事会

第4日目(8日一月)、今日は6時起床でゆっくりしており助かりました。朝食は代わりばえのしないパン食にコーヒー・ジュースの軽食で済ませ7時15分ホテル出発。チェイ小学校に着き8時まで最終準備(グラウンド整備・バレーネット張り、バスケットゴールの準備等)。8時から開会式。有森代表から「6小学校の指導者に小学校体育科学習指導要領完成に伴い体育の普及に向けて指導法等を伝授する機会を持ちましたので、今後の取り組みにご協力をお願いします。」と挨拶されました。続いて8時30分から教室に入り、指導書の見方について、指導案の書き方・指導のポイントについて、また、評価の観点として愛好的態度・知識・技能・社会性について説明し、指導の割り振りを[指導書と指導案の読み書き30分、指導案に沿った指導法40分]と[実技指導40分]で始まった。第1講座、4年陸上、5年サッカー、6年バレーボールからスタートした。第2講座、4年サッカー、5年バレーボール、6年バスケットボール、レストランでの昼食時間をはさんで、第3講座、4年バレーボール、5年バスケットボール、6年陸上運動、第4講座、4年バスケットボール、5年陸上運動、6年サッカーと17時50分まで続いた。

私はバレーボールについては素人ですが、この度作成して頂いた指導冊子を用いて先ず教室において指導書の展開から指導案作成までの説明をした上で、実技面をバレーコートで指導案に沿って指導しました。整列は太陽を背にして並ぶ。健康の状況について確認。ランニングの後適当な間隔に開いて準備運動(ストレッチを含む)。バレーボール2人で1個のボールをもってキャップボール、オーバーハンドパスについて学生を相手に説明(足を前後に開きひざを曲げて、額の辺りに両手で三角形を作りそこにボールを捕らえて突き出す等)。その後実践する。1人はバレー経験者がいたが、ほとんどの者が未経験者であった。中でも



2 人の女性はボールを扱う事が初めての様でした。次にアンダーハンドパスについて説明（やや前後に足を開き足首、膝を半ば曲げ体重をつま先にかけて、お臍の前辺りに手を組んで肘を伸ばし 2 本の腕を一枚の板のようにして、ボールを手首から 5cm 程度上の辺りに当てる。ボールが腕に当たる瞬間まで、目を離さずにパスする）。その後実践する。アンダーハンドサーブについて説明（上体をやや前にして、膝を軽く曲げながら目標に向けて立ち、片方の手のひらにボールを乗せて、肘を伸ばして固定したもう一方の腕を、肩を軸として振り子のように振る。手首のやや上でボールを捕らえて、膝のバネと腕の振りを使ってボールを打つ）。その後実践する。アタックについて説明（上体をやや前のめりにして、膝を深く曲げて立ち、ボールが頂点に達したとき踏み切る。腕を後ろに振りかぶって踏み切った後ボールを打つために反る。手の平の根元の部分でボールを捕らえて、上体のバネと腕の振りを使ってボールを打つ。後ネットに触れないように注意する）。その後、ボールをトスしてア



タック練習をする。最後にゲームをする(サーブを打ちレシーブして 3 回目に相手コートに返す)。ルールの説明をする。ここではバレーボールへの親しみ方を体得してくれることを願っている。最後に、次のゲームに向けて反省点・改善点を話し合う。風もなく、太陽もほどほどでアウトコートで行うバレーボール日和で、皆さんが楽しく出来たことが何よりでした。この度の、通訳は吉備国際大学 4 年生のラック・サナ(カンボジア出身)さんで私が話していることは全て伝わったと思います。残念ながら、都合で 5 年生のバレーボールは取りやめとなりました。

午後は 6 年生の授業を同様な形式で行いました。全ての授業が終了して、明日の研究授業の担当者と種目の発表がありました。4 年生はバレーボール。5 年生はバスケットボール。6 年生は陸上運動の授業を研究授業とし、担当はチェイ小学校の教諭がグループ代表で子供たちに指導することとなりました。

ホテルに帰りシャワーを浴びて 19 時からの「友好親善食事会」に向かった。会場では明日のことを考えてアルコールはほどほどにとの事であった。会食中、向かいの者に明日の研究授業は大丈夫ですかと尋ねると、大丈夫ですとの力強い答えが帰ってきたので安心しました。食後は、新家さんのリードでカンボジアの指導者と一体となり「アブラハムの子」の演技で盛り上がり、終盤「有森コール」で有森代表を巻き込み更にヒートしました。最後は、参加者みんなで記念の写真を撮り解散しました。

研究授業・担当教員からの質問と講評



第 5 日目(9 日一火)、昨日同様ゆっくり朝食を取り、7 時 15 分ホテルを出発。昨日の授業を受講したチェイ小学校の先生がグループ代表で指導する種目の指導案を作成してきているので 8 時～9 時まで授業準備と指導案についてアドバイスを。9 時から開会式有森代表が挨拶。9 時 30 分から私の担当する 1 時間目の 4 年生のバレーボールから始まった。皆が見守る中緊張感が漂うが、ムオイ、ピー、ヴァイの掛け声で楽しそう。準備運動中教諭仲間からアドバイスが飛び協力体制が見られる。主運動のバレーボールが始まった。指導者からの

説明に続き子供達のはしゃぐ。楽しそうだが、ボールはままならないようだ。指導者がまず師範をして見せる。そして、オーバーハンドパス。アンダーハンドパス。トス・アタック等順調に進められる（易しいことから難しいことへ）。全体総括責任者の山口拓さんから予定



の時間が来るが終わるだろうかと心配そうに声がかかる。最後の予定のミニゲームも始まっている。もう少し時間が欲しいが大丈夫だ！そして皆の大拍手で最初の研究授業が無事終了。終了後、時間外であるが生徒の皆でバレーコートの整備をする。指導者は安堵感を感じた様子だ。爽やかな汗をぬぐっている。私はチェック項目を記載する。後の講評の時にと思ったからだ。だけど昨日初めて私から指導を受け、一度やって経験して見ただけなのに、よくもここまで説明と師範を行い生徒を動か

し指導出来たものだと感心する。次は、10時20分から5年生のバスケットボール、昼食をはさんで14時から14時50分まで6年の陸上の授業があった。その間、横目で見ながら先ほど行われた授業の反省点についてまとめる。

その後、教室に入り質疑応答と講評。質問が次々とする。これまでの組み立ては如何するのか。この質問には、いささか答えに困りましたが、今回は初めての事なのでこれまでの積み重ねがなく(経験がなく)始めての取り組みなので苦労されたと思います。今後はお互いに経験する事で(実践することによって)積み重ねができる。今回の4年生で言えば、1・2・3年生があつて、4年生なのだ、と。それから、指導のポイントについて質問があった。授業では私の説明で皆さんは実技体験したが、いざ生徒に指導伝授しようとして困ったところです。教室においてボールを使ってパスの要点(ポイント)について、スローで説明する。師範の仕方について、最初からスパッとやって見せるより、ゆっくりとポイントを説明して見せ、生徒に納得させるためには、最後にサッとやって見せるテクニックを付け加える。納得するのと出来るのとでは違いが有る。説明をしていると山口さんから合図があった。あつと言う間に予定の時間は経過した。

グラウンドに出て贈呈式ならびに閉会式。有森代表からシェムリアップ州チェイ小学校にグラウンド施設等の贈呈。引き続き参加賞のバッグや6小学校にボールの贈呈。小原からタオルの贈呈。チェイ小学校長・教育行政官からのお礼の言葉等があり、最後、この度の指導会で指導に当たられた方々にチェイ小学校校長さんから一人ひとりに「感謝状」が送られた。そして参加者全員にプレゼントがあり、指導会は無事成功裡に終了した。



指導会を終えて

ホテルに帰り、急いでシャワーを浴び直ちにホテルを出発。途中クッキーのお土産を買いによる。夕食は始めて日本食で弁当であった。食後はそれぞれの方から、今回のカンボジアの思いを語る時間を取った。緊張の一瞬である。皆さんから指導会への思いがひしひしと伝わる。その後、ナイトショップとしゃれ込み皆さん更にお土産を買い込む。そして、飛行場に向かう。通訳を務めてくださったサナ・チャイ・中島・山口・教育省行政官(スラン・リアン氏、チャン・タウン氏)等が見送りに来て下さっていた。時間の関係で、岡山空港ではあわただしいと思い、インチョン空港内で解団式を行いました。22時40分発KE688であったが1時間遅れでシェムリアップを後にした。

皆さん健康を害することもなく、充実した実り多い4日間であり素晴らしいスタッフに感謝！ 今回の指導スタッフによる、指導要領の指導会は考えてみれば、カンボジアの将来に向けて大きな足跡を残し、次への課題を抱えながらカンボジアの小学校体育の授業がスタートしたと言えよう。そして、更に推進・発展していくためにも我々の手が引き続き差し伸べられる機会を持つことを希望しています。

謝辞

この度、カンボジア王国教育省とともに小学校保健体育科指導要領、指導書作成支援事業に引き続き、それを活用するためにチェイ小学校の先生方への指導と施設整備の支援を計画した。今回は、チェイ小学校を中心にセムリアップ州の6小学校の指導者を集め4年・5年・6年生を対象に陸上、バスケットボール、サッカー、バレーボールの4種目について指導する企画を、HG・岡山県大学スポーツ国際交流推進機構が共催で行うことを、この第二回日カン交流・研修ツアーに指導・研修会を組み込んだ。その準備段階からHG事務局長の田代邦子さん・HGアジア地域事務所所長山口拓さんからご指導を受けた。指導内容については、カンボジアの事情が分からない者達ばかりで、1から説明を聞き、地元指導者への指導会・研修会について、また、指導案の作成については手順を踏んで事細やかに指導を頂いた。現地での指導会・研修会においては、地元指導者へフィードバックとあらゆる過程において、この度参加された多くのスタッフの方々に献身的でまた行き届いたご協力を頂いた。この紙面をお借りしてそのご尽力に対して心より感謝申し上げます。また、岡山理科大学太田正和教授、川崎医療福祉大学柚木脩教授の強力なバックアップに支えられ成功裡に終了し心から御礼申し上げます。

帰国して

12月6日山陽新聞(朝刊)の1面にカラー写真入りで『「体育教育の先駆けに」と表題がつきカンボジア小学校運動場が完成』有森代表のNPO(残念ながら写真は昨年のものでした)。引き続き12月10日の山陽新聞にカラー写真で『カンボジア小学校に運動場贈呈、岡山のNPO 有森代表らが出席』HOGから寄贈された運動場でバレーボールの授業を受けるチェイ小学校の児童』と報道された。

まず、吉備国際大学藤田和弘学長さんに「カンボジアに行って来ました」と報告に行き、出来るなら吉備国大の学生も国際貢献のボランティア活動が出来るといいと思います。と話す、学長さんも同感だ！と言っておられました(ただお金の問題があるが、この活動は広めないといけませんね)。

多くの仲間から、「カンボジアに行かれたんじゃなー、新聞を見たよ！」と言われた。

カンボジア
岡山出身の五輪メダリスト有森裕子さんが代表のNPO法人「ハート・オブ・ゴールド」(HOG)本部で、カンボジアの小学校に運動場を贈呈する。今年1月、カンボジア・プノンペンへ。

小学校に運動場贈呈
岡山の有森代表らが出席

有森裕子さんが代表のNPO法人「ハート・オブ・ゴールド」(HOG)本部で、カンボジアの小学校に運動場を贈呈する。今年1月、カンボジア・プノンペンへ。

HOGから寄贈された運動場でバレーボールの授業を受けるチェイ小学校の児童

有森裕子さんと話をした。同国教育省の要請を受け、HOGが数回、カンボジアに派遣して、小学校の体育教育の指導を支援する。HOGは、カンボジアの小学校に運動場を贈呈する。今年1月、カンボジア・プノンペンへ。

有森さん代表のNPO

カンボジア小学校 運動場が完成

カンボジア教育省幹部に中古ボールを贈るHOGのメンバー(左列)。運動場の完成で同国の体育振興が期待される。今年1月、カンボジア・プノンペンへ。

体育教育の先駆けに

有森さん代表のNPO

カンボジア小学校 運動場が完成

指導会に参加して

御津中学校 森 祐子

今回、指導会に参加させていただいて、強く印象に残ったのは、カンボジアの先生方の、子ども達への愛情と教育に対する熱意だ。指導会2日目には、カンボジアの先生達が実際に授業をされたが、とてもすばらしいものだった。初日に学んだ内容を理解し、さらに自分なりの工夫を加えてあった。子ども達は、先生の言動に引きつけられ、ワクワクしながら授業を受けていた。先生は新しいことが学べることに興奮する子ども達を落ち着かせ、集中させ、そして盛り上げる。前日の日本の先生・大学生の指導の功績はもちろんだが、先生方の指導力と普段からの児童との信頼関係があってこそだと思う。先生方も子ども達もみんなにこにこして、教える喜びと学ぶ喜び、充実感と達成感があふれていた授業だった。

授業の終わり、「もっとやりたい」と子ども達が先生に訴えていた。言葉はわからなくとも、その様子から十分に伝わってきた。「忙しくても授業が楽しいから学校に来る」そんな生徒が出てくるだろうと、反省会である先生がおっしゃっていた。すばらしいことだと思う。私はそんな授業をしたことがあるだろうか。日々の忙しさの中で、ついついそれを言い訳にその場しのぎの授業をしている私は恥ずかしい。授業とは、教師と子ども達が相互に多くのものを得ることができるものなのだとすることを改めて教わったように思う。新しい世界を体験すること。自分を知ること。自分にチャレンジすること。協力すること。ルールやマナーを学ぶこと。そして楽しむこと。

指導会の前日、準備と確認のため、チェイ小学校を訪れた時、子ども達が石灰の袋に手を突っ込み、真っ白になりながら、ラインをひく姿にショックを受けた。日本では考えられない光景だったからだ。設備も日本と比べれば足りないものだらけである。しかし、カンボジアには、与えられるだけではなく、あるもので創意工夫し、自分達の力で作りあげていくパワーがある。実感がある。手作りの道具を使い、教師も子ども達もいっしょに楽しんで運動場の整備をする様子を見てそう思った。実はその裏にある苦労はとても大きなものだろうが、しかし、カンボジアはたくましい！そして明るい。

きっと、これからカンボジアの国の小学校小学校に先生と子ども達の笑顔が広がっていく。本当に楽しみだ。途中困難なことも多いだろうが、バイタリティあふれる先生・子ども達の力できっと乗り越えられるだろう。指導会にまでたどり着くまでカンボジア、日本の多くの方のご苦勞と、努力があったことだと思う。今回、カンボジアの先生方の情熱が、ハート・オブ・ゴールドの、日本の先生方・大学生達の努力によって形となった現場に立ち合わせていただいたことから感謝したい。

そして、御津中学校のボールが海を越え、カンボジアの子ども達の喜びになっていることも私の生徒達に忘れずに伝えたいと思う。



授業をふり返って（6 学年陸上運動・反省会まとめ）

○ 授業者

- ・ 陸上の走り方がわかってとてもうれしい
- ・ 生徒達「楽しかった」「何回もやりたい」という声がうれしかった。
- ・ 今日授業を受けた子ども達から近所や家族にも学んだことが広がっていくだろう。

○ 参加者

- ・ ワークショップに参加してよかったこと
 - ① 体育のやり方がわかったこと
 - ② スポーツの価値 健康につながるということこの2つを子ども達に伝えたいと思う。
- ・ 子ども達は楽しんでやっていたので体育が好きになると思う。
- ・ 教えやすかった。
- ・ 子ども達の能力についてわかるようになる。
- ・ みんなで行うことによって信頼をつくれるようになると思う。
- ・ 楽しかったのでまだやりたいという意欲につながった。
- ・ 陸上を通じて子ども達が協力できるようになると思う。
- ・ 5つのプレゼントを得られる
 - ① 協力
 - ② 興味
 - ③ 動作が素早くなること
 - ④ 体育があるから学校へ行きたくなること
 - ⑤ スポーツの値打ちを理解すること
- ・ 今まで陸上を学んだことがなかったのでまなべてうれしい。自分の学校へ戻り、子ども達に楽しさや健康スポーツの価値を伝えたい。
- ・ ワークショップで知識も得られ、いろいろできるようにもなったので自分の学校の子ども達に教えたい。

○ 教育省

- ・ 目標が大切、そしてその目標達成のために何をやるかが重要
- ・ 目標を子ども達に伝え、子ども達自身が目標を目指して工夫できるようにする。子ども達の能力は比較すると違うが工夫することはみんなできる。そして能力の高い子も低い子もいっしょに楽しくできるように
- ・ 全員で楽しくやることが一番大切。ほめることを忘れず。
- ・ ゲームを通じてルールやマナーを守ることを学ばせる。
- ・ 道具を使う留意点や片づけについても教えてほしい。
- ・ 言葉の壁を越えて90%理解できたのではないか。私は日本で体育の授業の研修をしてきたがほぼ日本と同じ授業だったと思う。ぜひ自分の学校に帰り、工夫して子ども達と授業を行ってほしい。プラス、カンボジアの要素も取り入れてほしい。

○ 指導者

- ・ 今日の授業でよかった点はたくさんあるが特に4つ。
 - ① 指示がわかりやすかった。例えば、コースに沿って並ぶように指示するなど具体的だったし、子ども達が指示を聞いていない時は指示を聞くように注意を集中させていた。また、子ども達が理解しているか確認もなされていた。
 - ② 走る前、走っている時、走った後、常に子ども達に配慮し、体調についても尋ねられていた。
 - ③ チームティーチング、先生方の連携がすばらしかった。
 - ④ 生徒の興味の引きつけ方、盛り上げ方がすごかった。ほめたり、みんなで喜ばせた

- あえていえば、トラックの中を走っている生徒がいたのでそこだけ気をつけさせてやってほしい。
- 小学校では楽しんで行うことが一番大切。楽しむためにはルールを守ること必要だし、みんなで協力することも必要になってくる。どうすれば楽しい授業ができるか考えていくことが大切。
- おのおの環境や子ども達が違う。つまり、何をすべきかも違ってくる。先生方の力でカンボジアに楽しい体育を広めていってほしい。
- 昨日先生方が積極的に質問をしてくわしく理解してくれていたのが今日の成功につながったと思う。
- 自分も楽しむことが子ども達を楽しませる秘訣だと思う。
- 今回、体育を通じてみんなで協力することの楽しさを伝えられたのではないかな。



カンボジアを訪れるのは約5年ぶり、2回目でした。

この度は大きな、そして重大な指導会を前に、準備は万全に行えただろうか、不備はなかっただろうか、うまく指導が出来るだろうか、という不安を抱えながらのツアー出発でした。準備でチェイ小学校を訪れ、チェトラさん手作りのバスケットボールを見たときの感動を忘れません。絶対に成功させたいという思いが強くなりました。いざ指導日になると、現地の先生方はとても熱心にこちらの話を聞いてくださり、質問も積極的にしてくださいました。また、実技になると、まるで生徒のように楽しんで取り組む姿を見て、今までの準備が全て報われたような気がしました。



研究授業では、指導会の内容をご自身なりにアレンジし、授業を進めておられました。初めて行ったバスケットボールを、次の日に子供たちに授業するという事は、本当に難しかったと思います。でも、それを成し遂げられた先生方はとても輝いておられました。

私自身、カンボジア体育の第一歩に少しでもかかわれたことを嬉しく思います。これからもっともっと子供たちが体育を好きになり、スポーツを通して大きく成長してほしいと思います。

最後になりましたが、この指導会を主動していただきました山口さん、田代さんをはじめとするハート・オブ・ゴールドの皆様、現地でお手伝いくださったボランティアスタッフの皆様、指導会にかかわる全ての方に感謝いたします。ありがとうございました。





自分たちの今回の指導が、カンボジアにおける体育の本格的なスタートとなったと思うと、「とんでもないことをしてしまったなあ…」というのがツアーを通じての率直な感想です。

今回、ツアーへ参加するに当たり、大学から一人で参加していたこともあり、「友達できるかなあ…カンボジアの先生相手に指導なんてできるのかなあ…」と、不安だらけで、恐る恐ると参加しました。しかし、非常に密度の濃い6日間を過ごした今、非常に誇らしく、すがすがしい気持ちで、岡山空港に降り立ちました。

まず、今回の指導会は、自分達が指導者として、カンボジアの先生方に学習指導要領に基づく体育指導法を指導し、先生方がそれを基に指導案を作成、翌日それを基にした研究授業として実践、という流れでした。指導は決して簡単なものではありませんでしたが、通訳を介して1つ1つ理解してもらうまで全力で、「言っ
て聞かせてさせてみせ」を繰り返しました。その結果、先生達による研究授業は大成功を収め、最後には会場一体となって拍手喝采が起こりました。先生方も自分たちの全力の指導に、全力の授業で応えてくれました。前日の努力が実を結んだその時の感動は、時間が経った今でもうまく表現できませんが、一生忘れることはないでしょう。激しい感動のあまり「何も言えねえ」状態でした。



また、研究授業の後に、先生方から感想を聞く時間がありました。それぞれに異なることをおっしゃられていましたが、体育の指導要領も無い、という状態にも関わらず、陸上運動を通して、体育の本質を学び取っていたことに驚かされました。実践を通して学ぶこと、与えることがいかに大きいか、改めて思い知らされました。そして、一度の授業を通してそこまで学び取ってしまうカンボジアの先生方の教育に対する姿勢にも驚かされました。その姿勢を持って、今回各学年で行われた指導を先生同士で共有、更なる実践を重ねていけば、必ずカンボジアの子ども達にも、体育、スポーツの持つ本質的な素晴らしさを理解してもらえる、そう確信しました。

最後になりましたが、今回の指導会を企画・運営してくださった方々、高い意識を持って参加された方々、みんなの力がひとつとなって素晴らしいものを創り上げることができました。また、今までの積み重ねがあつてこそ、自分たちの指導によってカンボジアにおける体育のスタートを切ることができました。皆様に、心より厚く、厚く、御礼申し上げます。今後より一層のカンボジア体育の発展をお祈りするとともに、私も機会がありましたら微力ながらお力添えしていければと思います。



オーケンチュラン！

今回「カンボジア王国小学校体育科指導書作成支援事業」に参加させていただきとても多くのことを学ぶことが出来ました。

現地の教員に「バスケットボール」を指導させていただくことになり、日本でカンボジアの教育の現状を考えながらの指導案作りから始まり、試行錯誤を繰り返しながら何とか形になりました。

実際にカンボジアに来てからは、現地の教員にバスケットボールの指導会、指導案の書き方の授業を行い、翌日には実際に現地の教員が子ども達の前で授業を実践するのを評価、補助しました。



まだ社会に出たことの無い大学生の私がこのように大それたことをしても良いのかという疑問もありました。しかし、現地の教員の方は一生懸命私の話を聞き、1つでも多くのことを吸収しようという姿を目の当たりにしたことで、そのような思いはなくなりました。

カンボジアにおけるバスケットボールというのは、見たことはあるがやったことがないという教員の方が多く、やはり子ども達の前で実践した授業はまだまだ改善点が見られました。しかし、この活動は今始まったばかりです。最初からうまくいくはずがありません。むしろ授業後の反省会は現地の教員から積極的に質問が多く出るなど、とても内容の濃いものになりました。

また「スポーツ」ではなく「体育」を教えるということ。将来教員を目指している私自身にとって、この問題はカンボジアだけでなく日本にもいえることだと思いました。今回の活動はカンボジアにおける小学校体育にとって大きな1歩になったと思います。その活動に関わることができ本当に感謝しています。ありがとうございました。

最後に、カンボジアの体育教育が今後より発展しますように切に願っています。





私はこれまでスポーツとはほとんど無縁の世界にいたので、正直に言うと、本当にこのような指導会に参加して良いのだろうかという不安を抱きながらの出発となりました。しかし、出発前の不安はいつの間にか消え去り、帰路につく際の私は満足感でいっぱいでした。

私が満足感を得ることが出来たのは、紛れもなく現地の先生や子どもたち、そして指導者として実際に指導を行った日本の先生や学生のおかげです。日本の指導者の方々の「体育、スポーツの素晴らしさを伝えたい」という純粋で真っ直ぐな想いが、カンボジアの小学校の先生に伝わり、先生がそれを子どもたちに伝える…。こんな素晴らしい光景を実際に目にすることが出来たのです。

私は特定のスポーツを長く続けた経験はなく、また決して運動が得意とは言えません。しかし、そんな私にとっても「体育」の授業は大好きな科目の一つであり、体育の授業がない学校生活を想像するとゾッとします。体育やスポーツには、人を魅了するものがたくさんあります。この指導会を通して、体育やスポーツの持つ可能性や魅力が現地の人々に伝わったと信じています。

指導の補助員としてはあまり役に立てませんでした。先生や子どもたちと一緒にスポーツの楽しさを味わうことができ、素晴らしいメンバーに囲まれながら、少しでも活動に携われたことを誇りに思います。本当にありがとうございました。



ハート・オブ・ゴールドの活動に参加しての感想

川崎医療福祉大学 大作 有紀

今回の活動で私はサッカーの指導を担当しました。サッカーはカンボジアで人気のあるスポーツのひとつだと聞いていました。実際もボールがあれば、サッカーをしている子どもたちがたくさんいて、ルールもある程度知っていると感じました。

しかし、学校の体育となるとスポーツとは違います。体育のサッカーは全員が楽しく体を動かすようにしなくてはならないと思います。

なので、サッカーを楽しむためには、全員がボールに触れる機会を教員が作らなければならないと考えました。

この考えの下、「チェスサッカー」や「ラインサッカー」を指導内容に入れました。指導会で、「チェスサッカー」は、全員がボールに触ることが出来き、「ラインサッカー」は、いつもよりゴールが大きいので点が入りやすくなったと思います。

カンボジアの共通言語であるクメール語は聞いたことも見たこともなく、言語の壁は確かにありました。しかし、今回の体験で、現地の先生方、通訳の方、ボランティアの人たちなど、みんなでサッカーを楽しむことができ、「スポーツは世界の共通語」という意味を肌で感じる事が出来ました。

今回の指導会では、私自身の準備不足もあり、至らない点が多々あり、今になって、もっとも準備に時間をかけておけばよかったと思います。

このような活動を継続的にやっていくことが大切だとわかり単発的な活動にせず、私に出来ることを見つけ継続的にボランティアを行っていきたいと思います。

ハート・オブ・ゴールドの活動に参加し、本当に良かったです。ハート・オブ・ゴールドの皆様には本当にお世話になりました。ありがとうございました。





川崎医療福祉大学 土井 宏美

今回、初めての海外旅行ということで、本当に不安でした。

更に、まだ学生で、学校で指導をした経験は教育実習しかない私がカンボジアの先生方に指導なんてできるのかどうか、不安で仕方ありませんでした。

また、卒論と指導案とを同時に進めていくことは困難で、指導案の方は正直なところ完璧に作成できたとは言いがたいものでした。

そんな中で行った今回の指導会でしたが、本当に大成功で、子ども達の楽しそう

な笑顔と先生方の達成感に溢れた顔を見たときは、自然と涙が溢れ、止まりませんでした。

これが、カンボジアの小学校体育の大きな第一歩であることを期待しています。

達成感を経験した人は、ひとつ成長するとありますが、あの場にいた全ての人々がひとつ以上成長したのではないかと感じています。

今回私は文章では表せないくらい大きな何かを感じました。

世界というものを全く知らなかった私にとって、今回の経験は私の視野を何倍にも広げ、新たな発見をいくつもしました。

それは、全てがよかったことだけではなく、目を背けたくなるような現状もありましたが、そのことも私の考え方や価値観も変える出来事でした。



今回、このような企画に参加させてくださり、このような経験をすることが出来たのもハート・オブ・ゴールドの皆さんのおかげだと感謝しています。

また、5キロの部で優勝することができたことも思い出のひとつとして刻まれています。次は10キロの部での優勝を狙います（笑）

今回のツアー・指導会を通じて得たものはこれから一生の財産になっていくと思います。そして、これからも機会があれば、第一歩を踏みだしたメンバーの一員としてこの企画に参加していきたいと思っています。

今回のツアー・指導会に参加した全ての皆様にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

そして、またの機会を楽しみにしています。

今後のますますのハート・オブ・ゴールドの発展・カンボジア小学校保健体育の発展をお祈りしています。



私はスポーツが苦手な今回のツアーではみなさんに迷惑をかけるのではないかと不安でした。しかし、前回の HG CYA-JYA でラククロスを通して、カンボジア人と日本人の心が通じ合ったあの感動が忘れられず、また、自分でもなにか出来るのではないかと思います参加させていただきました。

今回は主に、みなさんの活動をカメラに撮って記録に残すお手伝いをさせていただきました。マラソンスタート前の緊張感、ゴール後の達成感や充実感に満ちた笑顔など、うまく写真に撮ることができなかったかもしれませんが、カメラ越しに写るみなさんの姿はとても輝いていました。

チェイ小学校では、新しく建設されたグラウンドで楽しそうに駆け回る子どもたち、夢中でボールを追いかける子どもたちの姿を見て、きちんとした体育の指導がここで出来ればいいなと強く思いました。その思いは現地の先生方にもきちんと伝わっていました。1 日目の活動では不安な部分もありましたが、2 日目はガラリと印象が変わり、教師として子どもたちの前に立つ先生方の姿は素晴らしいものでした。そしてスポーツを通して、言葉は分からなくてもお互いに通じ合い、この活動を成功させようと心をひとつに頑張ることができたのではないかと思います。

今回のツアーでは、多くの方々の支援や協力があってこそその活動だったと改めて実感しました。ハート・オブ・ゴールドのみなさんをはじめ、ボランティアのみなさん、この活動を支えてくださった多くの方々に感謝しています。本当にありがとうございました。

